

課題部門 テーマ：嬉しい便り

優良賞「5年前の自分から」

現代ビジネス学部国際観光ビジネス学科 2年2組 平中 ちあき

ハワイの留学を終え5か月ぶりに自宅に帰宅すると、私宛の郵便が何通か届いていた。そのほとんどが、どうでもよい便りばかりだった。そんななかに、緑の封筒に手書きで私の名前と住所が見慣れた字で書かれたものがあった。その時、はっとした。思い当たることが一つだけあった。中学校を卒業するときに、15歳の自分から20歳にむけて自分に書いた手紙だ。中学校の頃の私は、悩み事がつきない時期であったと思う。そんな自分がどんなことを思っていたのか。どんなことを5年後の自分に綴ったのか。そんなことを考えているとすぐに封を切ることはできなかった。自分を見つめることが苦手な自分にとっては、なんだか恥ずかしく感じた。

数日たって、やっと意を消して封を切ってみた。5年前の自分が今の自分に語りかけていることは意外なものだった。最初の一行目は、「行きたい高校に行って楽しめましたか？」中学校を卒業してすぐのことを聞きたかったのは、当時一番心配していたことだからだろう。このときの一番近くの大きな目標だったし、当時必死になっていたことだ。だから、私は20歳を迎える前の自分について最初にたずねたのだろう。当時描いていたキラキラした高校生活とは少し違っていただけれど、志望校に進学し、ずっと大切にしたいと思える友達にも出会うことができた。

次に問いかけていたことは、高校より後のこと。大学へ進学したのか、それとも専門学校に進学したのか。とにかく高校に進学することしか考えていなかった私は高校に入学することから先は、真っ白だった。だから、5年後の自分がハワイで5カ月も過ごすなんて、夢にも思っていなかっただろう。未だに、こうなりたいという大きな夢がなくて落ち込むときもあるけれど、挑戦する目標を見つけることは中学生のころからできていたのかもしれない。この手紙から気が付いたことだ。

二つ目の段落に書いていたことは、20歳の自分が中学校時代を振り返るとどう思うのかということ。私は、このように書いていた。「いろんなことがあったけど、決して無駄じゃなかったって思っていたらいいな。」正直中学校のころの思い出は良いことばかりではない。記憶からけしてしまいたいと思うものもある。でも、5年前の自分が手紙に書いてるように決して無駄だとは思わない。なぜなら、今にちゃんとつながっているから。中学校の頃からはじめた英語は、自分の強みになっているから。あの頃一生懸命勉強した基礎があるから高校でも唯一の得意科目であったし、留学にも挑戦してみようと思えた。当時は、気が付いていなかったけど、長く熱中できることを見つけることができていたんだとこの手紙が気づかせてくれた。

そして、最後の段落に書いていたことは、少し痛いところをついていた。自分の短所。これは正直5年前と変わっていないと思う。「強がってないで相談できるひとが周りにいる事をわすれないで。」私の短所は、なんでも自分でことを済ませようとして自分の首をしめてしまうこと。中学生のころは誰かを信頼するということが苦手だった。だから、私も信頼してもらえず相談のつもりで言っていることが陰口になってしまっていた。高校生の時は、仲間を頼むということがうまくできなかった。どんどん自分の役割が増え、その役割をなにひとつこなせてない自分が嫌だった。

しかし、大学生になってすこし自分を好きになれた気がする。特に、ハワイに留学してから。なぜなら頼りになるクラスメイトや信頼できるホストファミリーに出会うことができたからだ。なにより、いつもそばにいる家族の存在の大きさにも気が付くことができた。そして、大学生になってこれから自分はどんなことがしたいのか、どんな生き方がしたいのか考えることが多くなった。私の周りには、素晴らしい人がたくさんいて、自分の接し方次第で助けてくれる人がいることを忘れないようにしたい。

5年前の自分が今の自分にアドバイスをくれたように感じる。初めはもどかしいと思っていた手紙もとっても嬉しい便りとなった。

#### <講評>

図らずも5年前に自分宛てに自分で書いたタイムカプセルのような手紙を受け取る羽目になってしまった筆者の心の葛藤がおもしろい。会いたいような会いたくないような過去の自分と向き合い、その心の動きを素直に描いているが、この数年の生活体験を織り交ぜて、自分の生きざまに素直な気持ちで向かい合い思考を深めている。人の心に染み入るような説得力のある良い文章で書かれている点が評価される。加えて、過去の自分からの問いかけ・アドバイスという骨格が優れている。本作全体で自分の人生をうまく示している。文章も上手というほどではないが、センテンスを短くすることで読ませる力をそなえている。過去の自分に対して回答を示す着地点も良い。特に、5年前の自分が差し出した手紙から素直に鋭く問い返される現在の私は、一面において怖さを覚えるが、同時に、もがきながらも生きてきたことへの手応えが掘り起こされ、勇気づけられていく。過去の自分に向き合う気恥ずかしさと、それとはうらはらはなほんのりとした嬉しさが素直な筆致で表現されており、過去の自分に感謝しつつ将来にむけてがんばろうという前向きな姿勢に好感がもてる。極めて希少な出来事であるが、圧倒的なリアル感を伴って語り込まれる筆者の感情の動きに、読者もいつしか引き込まれてしまう作品である。最後のまとめにもう一工夫を加えればもっと秀逸なエッセイになる。

審査委員／吉目木晴彦、八木秀文、大庭由子、小倉有子、富岡治明（委員長）